



科学コミュニケーション

高木 鞆生

「私の周りの人々のうち、応募しないのは私だけだ。私が説明できるとは思えない」

1920年、米国の科学雑誌「サイエンティフィック・アメリカン」は、一般相対性理論を一般の人々にも理解できるよう簡潔で平易な解説文を5000ドル（現在の価値で5万ドル以上）の懸賞金付きで募集した。その話を聞いたアインシュタインはこう語ったという。1916年にほとんど独力で確立した一般相対論の正しさが日食の観測で初めて実証されたのは、この懸賞がかけられる前年の1919年のことだった。

冒頭の言葉を聞くと、科学の天才アインシュタインも、研究成果を一般の人にわかりやすく伝えることについては適任でないと考えていたようだ。自分の成果を科学的知識のない人々に理解させるのは本質的に不可能だというあきらめに似た気持ちがあったのかもしれない。

一般相対論は物理を学んだ人間にとってもきちんと理解するのは容易ではない。科学の中でも特に難しい部類に入るのだろうが、他の分野でも研究者・技術者の多くは多分に似たような気持ちを抱いているのではないか。

数学やデータ、抽象化された概念で組み上げられ、専門用語で語られる科学技術の世界と、日常

的な言葉や具体的なイメージで語られ表現される世界との間には厚い壁がある。

最近、科学技術の成果を社会に伝え、一般の人々の理解を高めるための科学コミュニケーションの重要性が指摘されているが、こうした厚い壁があるという現実はずっと認識しておく必要がある。ただ、現代はアインシュタインの時代に比べれば、科学技術が社会に与える影響は比較できないほど大きい。壁を放置してはおけない。

原子力や遺伝子組み換え食品、BSE（牛海綿状脳症）、薬害、生殖医療などの問題を「難しいことはわからない」と言って避けるのは、社会の一員として今や誰にも許されない。理科教育や普及啓発活動の充実による国民の科学技術リテラシーの向上が欠かせないの言うまでもない。

ただ最近少し気になるのは、これらの問題がなかなか解決しないのは科学技術に対する国民の理解が足りないからだという空気が、国が後押しする科学コミュニケーション重視の背後に感じられることだ。先端科学技術の受容を社会に求めるときにパブリック・アクセプトランスという言葉が使われるが、科学コミュニケーションは明らかにそれとは違う視点に立脚するべきだ。

（日経サイエンス社代表取締役社長）

CONTENTS

科学コミュニケーション	1
例会報告1 生命と逆システム学	2
例会報告2 地震学は疾風怒濤の時代	3
例会報告3 石油文明を問う	4

例会報告4 京都議定書の道のり	5
会員報告 自著後記（大江秀房）	6
WFSJロゴ決まる	7
事務局だより	8

「生命はメカニズムの重なり合いだ」

逆システム学の児玉龍彦教授

▼児玉龍彦さん (片桐良一撮影)



04年11月例会は17日、内科医の児玉龍彦・東大先端科学技術研究センター教授を招いて開いた。児玉さんは友人の経済学者、金子勝慶大教授と共著『逆システム学』(岩波新書)を出し、遺伝子還元論と全体論の不毛の対立を克服する新パラダイムを提案している。講演では、生命科学から医療まで幅広い話題に言及し、逆システム学の刺激的な意味を存分に語った。要約は困難を極めるが、例会の一端を紹介する。

遺伝子を全部測ろう

生命科学には、要素還元論と、「個の集まりでは全体が分からない」とする全体論の対立が根強い。そこで複雑系の理論は、ほとんど役に立たない。われわれが提唱した逆システム学は「システム全体は知らない」という立場でスタートする。システム生物学とも違う。

ワトソンとクリックがDNAの二重らせん構造を発見し、DNAからRNAが写し取られ、さらにタンパク質が作られるというセントラルドグマが生まれた。ジャコブとモノーは負のフィードバック制御を発見した。遺伝子が制御される。合わせて現代の生命科学になった。

多因子疾患の動脈硬化を研究していると、要素還元論だけではいけないと痛感する。動脈硬化は、血管壁にコレステロールがたまるメカニズムが重要で、脂質がマクロファージに取り込まれる遺伝子を突き止めたかった。その研究のため、32歳から米マサチューセッツ工科大学(MIT)で4年間、牛の肝臓から原因遺伝子探しを続けた。30回試みて29回失敗し、帰国する時にようやくとれた。

この成果はネイチャー誌の表紙になった。しかし、動脈硬化には距離があった。東大病院屋上の小屋で、この遺伝子を欠損したノックアウトマウスをせっせと作った。すると、すごく動脈硬化を起こす系統と、動脈硬化を起こさないマウスがあった。ネイチャーは、仮説に合う研究は掲載するが、都合の悪い実験結果は出ない。都合が良いところ取りの科学になり、バイアスがかかる。

1996年に先端研に移ったとき、ノックアウトマウスの実験をやめて、遺伝子を全部測ってみようとした。ヒトの遺伝情報はほとんどが制御系の配列で、その非線形の重なりが遺伝子の働きを決めている。DNAチップが登場し、遺伝子の全部が見られるようになって、研究方法を変えた。

人間を知らないという謙虚さ

動脈硬化になると、ある領域の細胞に100個ぐらいの遺伝子がワァーッと発現してくる。それをパターンとしてとらえる。どこかで制御系のスイッチとして統合されているメカニズムがある。そこを見ていきたい。治療薬は制御系に介入すべきなのに、そこはほとんど分かっていない。

生物は多重フィードバックとみるのが逆システム学だ。「風が吹けば桶屋がもうかる」式に近い。SNPやEBMで個人差が分かるのか。時間軸を考えたい。個々の患者では治療を始めてからエビデンスが生まれる。治療する側が病気や患者を知っていると過信すると、医療事故が起きる。

病態をよく診て治療する。介入したら、良いか悪いか、そこからシステムを推定していく。個体は、いろんなメカニズムの束だ。生命の働きを理解するには、メカニズムがたくさん重なり合って振動しているというのが鍵を握る。フィードバックを考えないと、原因遺伝子は見つからない。生命科学で一番難しいのは、一つの状態から次の状態が変わるときのギアの入替えだ。

私は治療と薬ばかりを考えている。医者が何でも知っているというのは無理だ。ジャーナリズムが、たくさん患者を診ている人が名医とするのは、やめた方がよい。逆システム学の医療には、人間の体の中を知らないという謙虚さがある。

(小川明)

地震学は「疾風怒濤の時代」に

大竹政和・日本地震学会会長

12月例会の22日には、大竹政和・日本地震学会会長を招いた。東北大名誉教授で地震予知連絡会会長も兼ねる大竹さんは、阪神大震災から新潟県中越地震までの10年間で「観測インフラが革命的に前進し、研究が飛躍的に発展した」と語り、地震学の「疾風怒濤の時代」と総括した。例会には約40人が参加し、講演後、大竹さんを交え、忘年会風のサンドイッチパーティーで懇談した。大竹さんの話の要旨は次の通り。

列島の息吹を見る

阪神大震災からちょうど10年。私の目にこの間の地震学がどう映ったかを話します。

観測インフラは、10年前には想像もできなかったほど、革命的な前進を遂げた。高性能の地震観測点は全国で数千点張り巡らされている。気象庁や防災科学技術研究所（防災科研）、各大学などのデータが現在、気象庁で一元化され、統合した観測ができるようになった。

驚くべきはGPSだ。国土地理院の固定電子観測点が約1200あり、各地点がどう動いているか、すぐ分かる。時間的・空間的に密な観測で、日本列島の息吹を見ることができる。GPSの観測によって、震源の断層がどう動いて地震が起きたか、断層モデルも求められるようになった。

海溝型地震は沈み込みのゆがみが限界に達して陸のプレートがはね上がる。繰り返し発生する。プレート境界に大小のアスペリティ（固着域）があって何十年に1回壊れる。その場所は決まって



▲大竹政和さん（片桐良一撮影）

いて、小さいアスペリティほど頻りに地震を起こす。東北大学の長谷川昭教授らの仕事で、岩手県・釜石沖の深さ約40kmにある釜石アスペリティが検証された。1950年代からここでM4.8～4.9の地震が5、6年間隔で起きた。

2001年の地震も予測して見事に当たった。

釜石ほど定期的な例は少ないが、地震の粗過程が見えてきた。複数のアスペリティが一緒に壊れることもある。プレート境界地震は実像に近いものが理解できつつある。しかし、阪神や中越のように活断層では難しい。内陸の断層のアスペリティを同定する方法を発見しないといけない。

緩やかな滑り

スロースリップの観測も進んだ。東海地震の震源域の北、浜名湖の真下でプレート境界がずると滑るスロースリップが2000年からのGPS観測で分かった。今も続き、累積エネルギーは既にM7を超えている。この滑りが加速したり、東に拡大したりすると要注意だ。摩擦の法則などから地震シミュレーションは始まったが、計算に必要な数値や手法をまだ入手していない。

深部低周波微動は「世紀の発見」だ。防災科研の小原一成さんらが高感度地震観測網で見つけ、02年5月の米サイエンス誌に発表した。西日本のフィリピン海プレートの直上で帯状に2ヘルツの連続微動が起きていた。傾斜計データと連動して半年に1回くらいバースト的に出るらしい。

全国98の活断層を選んで、地震発生予測が政府の地震調査委員会から出された。30年以内に震度6弱以上の地震に見舞われる確率を示す全国の地震動予測マップも05年3月に発表される。しかし、調べても分からないことは多い。このマップも使い方を十分注意する必要がある。

かつて地震学者は、地震予知研究を「ヨチヨチと歩く姿がいじらしい」などと自嘲した。98年に地震予知計画が改定され、観測と理論の両面から地震のサイクルを解明する動きが強まった。

それが革命的な観測網の発展で可能になりつつあり、地震学も近代科学の仲間入りをした。防災にも、もっと役立ちたい。地震学は複雑系の科学だ。自然科学に新しい地平を切り開きたい。地震学者は自然の複雑さに魅せられた思いで、研究を続けている。

（小川明）

余計なエネルギーを使わないよう

石井吉徳教授、資源の有限性を語る

1月例会は25日、石油を中心とした世界のエネルギー事情に詳しい石井吉徳・富山国際大学教授（東大名誉教授、元国立環境研究所長）を招いて開かれた。すでに石油生産のピークは過ぎている、地球温暖化対策もエネルギー消費量を考慮しなければ資源の無駄使いになると石井さんは主張。多くの質問が出る白熱した例会だった。

資源にはクオリティーが必要

私は地球物理学科を出た後、民間企業に入り石油資源の探査を行った。ちょうど日本が石油の探査を始める時代だった。そのとき感じたことは地球資源が有限であるということだった。

石油の埋蔵量は40年、いつまでたっても40年といわれている。結局いつまでも石油はあるのではないか、という声まで出てくる。しかし、この40年という値には油田資源のクオリティーが考慮に入っていない。

油田も、初めはやぐらが揺れるくらい勢いよく原油が噴き出してくるが、だんだん出てくる力が弱くなり、ガスや海水を注入しないと出ないようになってしまう。オイルシェール、オイルサンドは確かに膨大にあるが、そこから取り出すのにもエネルギーが必要だ。

なぜいつまでも原油寿命は40年なのか。この数値はオイル・ガスジャーナル、IEAから出ているが、実のところ原油のクオリティーが入っていない。ある時カナダの原油埋蔵量が2桁増えた。これはオイルサンドを埋蔵量に加えたためだった。日本では埋蔵量をさかのぼって調査することすらしていない。オイル・ガスジャーナルなどの数値は石油会社、石油産出国（OPEC）が出している値だ。石油産出国は生産枠組みが埋蔵量に関わってくる、石油会社は、埋蔵量がたくさんあるほうが株価があがるから、多めに言う。

資源として重要なのは濃縮されていること。どんなに大量にあっても、そこから回収するのに多くのエネルギーが必要では「使えるエネルギー」とはいえない。風力や太陽エネルギーも濃縮され

ていないので使うのは難しい。水素はつくるのに大量のエネルギーを使うので、燃料電池などはやらない方がいい。

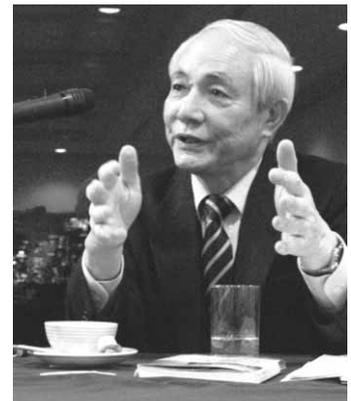
石油がなくなる前提で対策

日本は石油の90%を中東地域に頼っている。アメリカは20%以下の依存だ。国策として問題があるのではないが。

なぜ中東には原油がたくさんあるか。中東で石油ができたのはかなり特殊な条件だった。2億年前は温暖化で今より平均気温が10度も高かった。ここは当時内海で海水がかき回されず、堆積物が熟成しやすかった。その後の地殻変動でも赤道域から動かなかった。そのような場所は中東しかない。これから先、中東にあるような大油田を見つけることはできない。

農作物を作るのにもエネルギー、石油をつかう。石油を食べているようなもの。この先に必要なのは大量生産、大量消費をやめることだ。とくに日本の農業従事者は高齢者に偏っている。ここあたりから改変していく必要がある。

京都議定書については、将来石油がなくなると考えての対策と、このまま石油が出続けると考えての対策では違ってくる。二酸化炭素を大気中に放出するのをさけるために、地底や海底に送り込むなんてとんでもないこ



▲石井吉徳さん（片桐良一撮影）

とだ。そんな事をする、よけいなエネルギーが必要になる。いかに無駄なエネルギーを使わないようにするかが重要だ。

喜ばしいのは、20年前に比べて、「物」よりも「心」を大切にしたいと考える人が増えてきていることだ。このようなアンケート調査結果をみると、まだまだ希望をもてる。（片桐良一）

京都議定書「成功」のために 国際交渉の常連メンバー、亀山康子さん

京都議定書の発効を間近にひかえた2月8日、日本記者クラブで開いた例会には、地球環境政治学の亀山康子・国立環境研究所主任研究員を招いた。亀山さんは、気候変動枠組条約締約国会議(COP)全10回のうち8回まで日本代表メンバーとして参加、地球温暖化対策をめぐる世界の情勢を見守りつづけてきた。

議定書を「成功」に導くには何が必要か。亀山さんの話を聴きに非会員も含め多くの参加者が会場を埋めた。講演の要旨と質疑応答の模様をお伝えする。

米国に振り回されないビジョンを

日本政府代表の一員として、1995年のCOP1から会議に参加してきました。密室での交渉に立ち会えることには喜びを感じます。

京都議定書には、2013年以降の温暖化ガス排出量に関する義務については何も書かれていません。また、中国を含めた途上国は対象から外れており、2001年には米国も離脱しました。こうした問題を抱えながらも、昨年ロシアの批准と今回の発効は、議定書が「成功」と評価されるための第一歩となりました。

今後は、京都議定書の継続、または新たな目標を加えた「京都プラス」としての議定書の改正が課題となります。どこを目指しているのかわからないまま交渉をしているのが現状です。気候変動による影響を最小化するためには、温室効果ガスの排出量以外にも、その大気中濃度、平均気温の上昇幅など、人間の活動が気候変動を引き起こすまでの各ステージでの目標を考えることもできるでしょう。

主要国の動向を見ますと、議定書を離脱した米国は、各州の独立性が高いという背景もあり、州レベルでの排出量削減の取り組みに注目が集まっています。北東部主要州とカリフォルニア州を合わせた二酸化炭素排出量は、世界6位のドイツを上回ります(1998年)。州単位と



▲亀山康子さん (漆原次郎撮影)

しての影響を小さく見ることはできません。

これまで地球温暖化問題に関してつねにリーダーシップ的役割を果たしてきたEUは、東欧諸国の加盟などにより拡大化が進みました。今後は各国の利害が一致せず、リーダーシップがとりづらくなるのではないかと思います。

途上国については、これまで「G77(77か国グループ)+中国」のくくりで捉えられてきました。ところが中国は2002年のCOP8あたりから、単独で米国と渡り合える交渉力をつけ、台風の目になっています。

さて、日本はと言いますと、これまでの意思決定が米国の動向に振り回されすぎだったと言わざるをえません。京都議定書でもつねに米国の参加を重視してきました。日本が取るべき態度は、まず「世界がどうあるべきか」を示すことだと思います。その上で米国の意見を聞くべきです。

京都議定書後の将来枠組に関する交渉は、難航が予想されます。日本は日本としての「将来社会ビジョン」をもって交渉に臨むべきです。

各国の本音はどこに？

後半の質疑応答では、米国や中国など主要各国の「本音」を探る質問が多く出された。亀山さんは「ブッシュ政権にとってはエネルギー産業の利潤が国益」また「中国はエネルギー需要の問題に関心が高い」などと、各国の事情を紹介。一方、他国から「何を考えているのかわからない」と言われ、本音の見えにくい日本の姿を嘆いた。

会場からは、科学者が発信する情報が政治の場で活かされるべきとの意見がいくつか出された。亀山さんは「政策的メッセージに関心のない科学者が多い」と指摘し、科学者が団結することの重要性を認めた。亀山さんからも「マスメディアが、いろいろな事実の中から何を選んで伝えていくかは重要なこと」との訴えがあった。

地球温暖化問題には、各国の利害が違うという地域的差異とともに、いまの人間の活動が未来の地球に影響をあたえるという時間的差異もある。複雑だが解決しなければならない問題に取り組む亀山さん。冷静に応答する姿に、国際会議での交渉ぶりを垣間見た。(漆原次郎 = 第3期塾生)

『早すぎた発見、忘れし論文』後記

昨年11月、講談社ブルーバックから刊行された本書は、もともと専門誌『未来材料』（NTS出版）に連載したものがベースになっている。内容は、10人の科学者のドラマティックな生涯を描いたもので、そこに共通するのは、彼らのほとんどが若い時代に「画期的なアイデア」を手中にしながら、その考えが公に認められるまで、長きにわたり様々な批判や軽蔑にさらされ、失意のうちにこの世を去った、ということである。

その一方で、自分の考えをあくまで信じ、不遇の中で大いに悩みながら闘った勇氣ある科学者たちの物語でもある。彼らの自説に対するゆるぎない自信は、おそらく生みの苦しみの中でおぼろげながら見えてくる「直観」のようなものに支えられてのことだろう。

本書で注目して欲しいことが3つある。1つ目は、それぞれの科学者について、できるだけ生身の姿を映し出すような、かつ、これまであまり知られていないようなエピソードを多く盛り込んだことだ。たとえば、メンデルは生物が苦手な物理が得意であったとか、カオスの生みの親ポアンカレは強度の近視でノートがとれなかったため読んだ本を記憶し頭の中で整理する習慣を身に付けたとか、いったような。

2つ目は、各科学者たちが輝かしい業績に行き着く上で決定的な役割を果たしたキー・パーソンにめぐり合っているという事実だ。たとえば、天才の誉れ高い数学者のガロアやアーベルの場合、

いわゆる高校時代に、数学へと導いてくれた立派な教師と出会っている。また、「ロケット理論」の提唱者ツイオルコフスキーは、毎日勉強に通っていた図書館で善意の哲学者と出会い、物理学や数学の手ほどきを受けている。

3つ目は、2種類の年表（各科学者の年譜とそれぞれが生きた時代の学術的背景）を付けたことである。新発見への氣運が醸成される過程を読み取れるはずである。

ところで、本書の刊行を通して、私が思い知らされた貴重な体験についても一言触れておこう。これは特に、分かりやすい原稿を書く技巧として役立つかもしれない。昨年春、原稿を仕上げた編集者に送ったところ、2ヵ月ほどして、かなりの数の「コメント」で飾られた原稿が戻ってきた。その中で特に印象的だったのは、それまで私がいまいのまま無意識に使っていた「科学用語」、例えばアボガドロの法則、ボイル・シャルルの法則、相平衡、自由エネルギー、線形性と非線形性、トポロジーなどが、世の中の大勢を占める「科学にあまり馴染みのない人たち」にとっては、スムーズに読み進めるうえで障壁となっており、全体の理解を妨げているという指摘である。編集者のコメントに応じて書き換えているうちに、私自身がすでに「科学のサイクル」という枠にはまり込んでしまっていることに気付かされたのだ。この殻を破るのは、至難のわざである。

解決法を2, 3示すと、まず科学用語の前に解説を付けること、例えば「気体の圧力、体積、温度の間に $PV/T = \text{一定} (R)$ という（ボイル＝シャルルの法則）」のような記述スタイルをとるか、また自由エネルギー場合のように、「ちょうど水が高きより低きへ流れるように、物質系が自由エネルギーの高い状態から低い状態に自発的に変化する」といった身近なたとえを頭にもつくるのも一方法である。場合によっては、分かりやすさという視点から文を構成しなおしたほうがスムーズに読める。専門用語と文章の構成は、コミュニケーターやジャーナリストが、方法論として真剣に取り組むべきであろう。（大江秀房）



世界連盟のロゴ決まる

世界科学ジャーナリスト連盟は、昨年11月のモントリオールでの第1回総会以後、活動を活発化させています。

まず、ウェブサイトが一新され、充実した情報が盛り込まれました。www.wfsj.orgをご覧ください。事務局長に就任したカナダのジーン・マルク・フロイリー氏が瞬く間に整えてくれました。第1回総会の様子も、ここで読むことができます(英語ですが)。「会員」のところには、我がJASTJの名もあります。そこをクリックすると、モントリオール会議に間に合うように作った英語版パンフレットが出てきます。

世界連盟のロゴも決まりました。デザイナーが作った複数の案に対して電子メールで理事に意見が求められ、最終的に会長であるオーストラリアのウィルソン・ダ・シルバ氏が決めました。



なお、事務局の住所が変わりました。当初は、モントリオールのカナダ放送協会(CBC)のご厚意で、CBCの一室を事務局と定めたのですが、事務局長のフロイリー氏はオタワを本拠としており、連盟宛ての郵便物が事務局長のもとに届かないなどのトラブルがありました。専任の事務員を置くほどの力は連盟にはまだありませんので、現状ではフロイリー氏のいる場所を事務局として公表するのが良いということになりました。

今年11月10日から12日までハンガリーのブダペストで開かれる第2回世界科学フォーラム(www.sciforum.hu)を活用して理事会を開こうという案も出ています。私は参加できそうにありませんが、フォーラム参加者として旅費が支給される可能性があるそうで、JASTJを代表してどなたかに行っていただく道を探りたいと思います。

連盟設立の母胎となった科学ジャーナリスト世界会議(WCSJ)は、第5回を2006年8月から07年3月までの間にオーストラリア・メルボルンで開きます。2006年にソウルでPCST(Public Communication of Science and Technology)の国際会議を開く韓国から「参加者が重なるので、WCSJを2007年にしてくれないか」と要望が寄せられ、その要望もふまえ、オーストラリアの実行委員会が最善の時期を決めることになっています。(高橋真理子)

アインシュタインと並ぶ光栄

ドイツで人気の高い一般科学雑誌「PM」の2005年1月号が、巻頭言で当会編の『科学ジャーナリズムの世界』を写真付で紹介してくれた。ちょうどアインシュタイン特集号だったので、舌を出している天才と並ぶ光栄に浴した。

執筆者の一人だったW.ゲーデ氏の肝いりだろう、筆者は「PM」発行人のH.スプラド氏。日本語が読めない嘆きが聞こえそう。「PM」は各国語版合わせて世界で300万部売れているそうだ。ドイツの出版・編集者の会報「Der Grüne Dienst」(2004年12月)にも、ゲーデ氏が表紙の写真付で紹介してくれている。あの本で「PM」を宣伝しているとはいえ、彼に感謝したい。(牧野賢治)



新入会員自己紹介

浅野 晶子 (Japan for Sustainabilityスタッフ)

日本の環境情報を世界に発信するJapan for SustainabilityというNGOに所属しています。科学的な事柄に大変興味があり、科学的な記事も書けるようになりたいと思い入会しました。よろしくお願いたします。

安藤 恵美子 ((財)日本宇宙フォーラム 広報・調査事業部)

入社以来、主に宇宙教育プログラム、宇宙関連国際会議を担当してきました。プライベートでは、大学院において「市民参加型の宇宙開発」を研究しています。多分野の方々との交流、ジャーナリストの方々の幅広い知見から学ばせていただきたいと思ひます。

亀田 幸成 (英国物理学会出版局・東京事務所)

学術論文誌(ジャーナル)出版に携わっています。論文発表の場としては、マガジ的な色彩で強く科学ジャーナリズムを意識したNatureが大きな成功を収めています。学会外部への情報発信はどうあるべきか探って行きたいと思ひます。

持丸 和朗 (サイエンスプロデューサー)

NHKでは「四つの目」「ウルトラアイ」などポピュラーサイエンス番組を制作。民放界に転じてからも目指すところは「知ることを楽しむ」科学番組です。現在指導・監修しているNTV系「所さんの目がテン!」は16年目に入りました。

安田 和宏 (玉川学園教諭)

有機合成化学の研究職を経て、現在、玉川学園で中高の理科・情報教育に携わっています。科学技術が進歩する一方で理科離れが叫ばれる昨今、教育現場における科学ジャーナリズムの意義を感じています。よろしくお願いたします。

渡辺 政隆 (文部科学省科学技術政策研究所上席研究官)

専門は進化生物学、科学史。サイエンスライター歴25年。フリーランスのサイエンスライターへの支援を期待しています。

事務局だより

■総会は5月17日に開催します

2005年度の定期総会を5月17日(火)午後6時から日本記者クラブ9階の宴会場で開催します。新年度に向けた事業計画や新役員の選任など重要な議案を審議します。会のあり方など提案のある方は事前に、会長や理事らにお伝えください。また、総会後には会員参加の企画行事などを行う計画です。追ってご案内をいたしますので、予定に入れておいてください。

■会員名簿を作成します

今年3月時点の名簿を作成します。これまでの名簿に変更のある方は事務局(hello@jastj.jp担当・池田純子)に連絡ください。名簿は会員だけに配布されます。会員間で役立つように職業と連絡先(住所=職場または自宅、電話、ファクス、メールアドレス)のリストを印刷していますが、掲載したくない項目があれば、その旨お伝えください。

編集 後記

おめでとう、とっていいのかどうか。中越地震被災者の悲嘆をかき消さんばかりのインド洋からの悲報が押し寄せるなかで、2005年の新春を迎えました。そして阪神大震災から10年の1月17日。大竹政和さん(地震予知連会長)は例会で「地震学の疾風怒濤の時代」と語っていましたが、地球そのものも激動の時代を迎えているのではないのでしょうか。

2月16日には、温暖化防止の国際協調の第一歩となる京都議定書が発効しました。科学記者としては、温室効果ガスと気象異変のつながりをしっかり見極めたいと思ひます。(俊)

編集・発行

 * 日本科学技術ジャーナリスト会議
Japanese Association of Science
& Technology Journalists (JASTJ)

〒105-0004 東京都港区新橋2-10-5 末吉ビル科学技術広報財団気付
会 長 牧野賢治 makinok34@yahoo.co.jp
事務局 長 佐藤年緒 hello@jastj.jp
編 集 長 武部俊一 stakebe@hotmail.com

ホームページ <http://www.jastj.jp>